

登場人物

フェイイルヴェルク・レンフェルト 妖精。ニコルとエルリックが融合した姿。ヴルーベリ

男子学院の校長となる。

ニコル・レンフェルト 妖精。フェイイルヴェルクが男女に分裂した後の女の方。フレッド

と結婚し、2人の子をもうける。

エルリック・レンフェルト 妖精で、フェイイルヴェルクが男女に分裂した後の男の方。

フレッド ニコルの夫。フレッドというのはあだ名。新人類。

セヴァスチャン・ヴルーベリ 今は亡きヴルーベリ男子学院の前校長。旧人類。

ストロー ヴルーベリ男子学院の副校長。新人類。

スターリング・エンフィールド ニコルとフレッドの間に誕生した息子。妖精。

アイレーン・エンフィールド スターリングが男女に分裂した後の女の方。妖精。

ナイチンゲール・ジャンベルト 『フロール・シャンフォード』と名乗り、ヴルーベリ男子

学院に通学中。フェイイルヴェルクに何かとつかつかつてくる。

フロール・シャンフォード ナイチンゲールの知り合いの妖精

ロージー・マインヴォルト ナイチンゲールの知り合いの妖精

六連 昴 人魚。妖精。姮娥と近親相姦の間柄だったが、現在は彼女と距離を置いている。

ディオオーネ・ネメラローダ 人魚。妖精。六連と姮娥の娘。

マドレア・ヴルーベリ フレッドの妹で、セヴァスチャンの妻。新人類。

マリーナ・ヴルーベリ マドレアとセヴァスチャンの娘。旧人類。

姮娥 暮天 六連の母。まぼろし山にある玉宮で優雅な生活を送っている。人魚。妖精。

未来人 カロンの息子。ヴルーベリ家の屋敷に住んでいる。新人類。

ルートヴィック・インファルト ニコルとフレッドの息子で、スターリングの弟。妖精。

ジェラルド・デミロード フレッドの父方の祖父。新人類。

キャロライン・デミロード フレッドの父方の祖母。新人類。

ハドロン・デミロード フレッドとマドレアの父親。新人類。

エレン・デミロード フレッドとマドレアの母親。新人類。

ルーン・ぴよん吉 セヴァスチャンの弟。妖精。

第1節 聞いていない

セヴァスチャン・ヴルーベリが亡くなった。そして次のヴルーベリ男子学院の校長にはフェイルヴェルクが選ばれた。

——聞いていない。

正直、セヴァスチャン・ヴルーベリとはそこまで親しかったとは言えず、自分が校長という器に相応しい人間（妖精だが）かどうかなど、どうして分かったのだろうか？

僕はとりあえず夫であるフレッドに助けを求めた。

「ねーフレッドお何か大変なことになっているけど、どうしよう！」

ちなみにそう言ったのはニコルであって、僕ではない。

フレッドは、ニコルの姿の僕を見て、次のように言った。

「しようがないだろ、ヴルーベリ男子学院の経営はヴルーベリ家の人間がすることに決まっているんだから、校長だつてやらなきゃならないんだよ。」

何だか面白くなさそうだ。

「で、でもあたしは何時ヴルーベリ家の人間になったの？」

「知らないよ、そんなこと。ヴルーベリ家の家に住んでいるから、ヴルーベリ家の人間なんだろう？それに男子校なんだからマドレアやマリーナが校長になるわけにはいかないんだよ。」

僕が校長になることを彼が快く思っていなかったのは明らかだったが、特に反対はしていなかった。セヴァスチャンにはびよん吉という妖精の弟がいたが、彼はセヴァスチャンの死後、フェアリーランドに帰ってしまった。しかし、もしもびよん吉がこの場にいたとしても、僕が校長に選ばれていただろう。びよん吉に校長の仕事は務まらない。

「とりあえず、しばらくは校長の仕事はできないね。」

フレッドは視線を落とし、気まずそうな声を漏らした。

「うんそうだね。」

僕：じゃなくてニコルは、出産間近のお腹を押さえた。

子供はまもなく誕生した。名前はルートヴィック・インファルトである。しかし人前ではデミロードという姓になっている。当然の事ながら男として誕生したルートヴィックは、妖精だった。僕たちの種族は男しか生まれえない。しかし、分裂すると男女に分かれる。なので、男とも女とも結婚することができる。抵抗がある人もいるが、特に問題はないだろうと思っていた。

一年後、僕は校長の地位につくことができた。

始業式の前日、校長室へ行くと、副校長が校長室にいた。彼は今まで校長の椅子に座っており、僕が来ると立ち上がり、僕の前まで来た。

「あなたがフェイイルヴェルクさんですか、私はストローと言いまして、この学校の副校長をしております。どうぞよろしく。」

ストローと名乗る初老の男は、深々とお辞儀をしてきた。

「…ご丁寧にどうも。」

僕は軽く手を差し伸べたが、気がつかなかったのか、握手に応じてもらえなかった。

少し気まずい。僕と彼は、校長の机の前にある、小さなテーブルをはさんで、向かい合うように置いてある、ソファアに腰掛けた。

「ところであなたはピアノが弾けますか？」

「一応は。」

「そうですか。わが校ではピアノが弾けないと教員にはなれないという決まりがあるんですよ。」

でも何で？

僕と副校長は、テーブルの上に用意してあった、ポットの中の生暖かいお茶を飲みながら話していた。

彼は、軽く咳払いをした。

「ところであなたはおいしくつですか？」

「はあ、砂糖はもう入れましたよ？」

—— そんなことを聞かれたのではないことくらい百も承知している。ただ、実際の年齢（二千歳を悠に超えている）を言っていないものか…。

「あなたの年齢は？」

ストロー副校長は、冗談の通じる相手ではなかったし、僕の返事に顔色ひとつ変えなかった。

「ところで前校長のセヴァスチャンは何歳で亡くなったか知っていますか？」

「勝手に話を変えないでもらいたいのですが。」

「彼は結婚するまでは子供の姿のまま、三百年以上も生きていた。」

副校長の眉毛がピクンと動いた。

「僕もそれと同じだと思っっているかな。見た目は十代半ばの少年かもしれないけど、実際は君より何倍もの時間を生きている。」

副校長は僕が校長に選ばれたことを他の誰よりも憎らしいと思っっているに違いない。彼はヴルーベリ家の人間ではないという理由だけで、校長にはなれないのだ。

「すばらしいですね。」

しかし彼は本当にそう思っっているわけではない。

「あのすばらしい前校長と同じような人が他にもいるとは思っってもみませんでした。さぞかし豊富な知識をお持ちなんでしょうね。」

「…まあね。」

二千年以上生きてるのに、自慢できるものがないと言う方がおかしい。

「ではフェイイルヴェルク先生。あなたの腕を見せてください。」
「は？」

「私はこの一年間、校長の代理を務めておりました。あなたがこの学校に慣れるまでの間、できる限りあなたの仕事を手伝いたいと思っています。」

「それはどうも。」

「でも一つ問題があるんですよ。」

ストロー副校長は僕に問題がある事が嬉しそうだった。

「あなたは今日から校長先生になり、この椅子に座ろうとしています。急ですが、急に校長の地位を得た者などこれまで一人としていなかったのです。あの前校長も、最初は一教師だったので。」

「何の先生だったの？」

「音楽の先生です。」

——思わず噴出してしまった。…似合いません。

「で、ストロー副校長は校長である僕に何をしてもらおうつもりなの？」

「あなたにも先生の仕事をしてもらいます。」

「!!!!!!」

そういう事は一年前から報告してくれるのが礼儀というものだ。もし一年前にそのことを知っていたら予習とか…するわけないが。

「先生？一体何の？」

「保健体育と美術と音楽と家庭科の先生をしてもらいます。」

「何でそんなに微妙な教科なの？」

「あなたがきちんとした授業をしてくれるという保障はないので。」

「……」

確かに彼の言っていることは正しい。僕だって最後に学校に行ったのは約五十年前で、知識もかなり怪しい。

「で、どのクラスを受け持つの？」

「あなたは大変お若いので、初学部の一学年を担当するのがいいと思うのですが。」

「絶対嫌！」

初学部の一学年と言ったらほとんどが五歳児だ。最初から親離れできていない子供たちの面倒を見るようなことはできない。先生一年生が学生一年生を教えられるとも思っているのだろうか。下手したら僕のせいで学校に来なくなるかもしれないのに。

「…では中学部でいいですか？」

「うん。できれば十二歳のクラスがいいな。」

この時、十二歳ではなく、十歳のクラスにしておけばよかったと、後々後悔することになる。

「十二歳ですか？十二歳のクラスは3クラスありますが、そのうちの1クラスを試験的に受け持つという事でいいですか？」

「いいです。」

ストロー副校長は言い終わるとため息をついた。僕が子供っぽい事に不満なようだ。だがこれでもニコルやエルリックよりは大人だと思っている。

何はともあれ、明日から保健体育と美術と音楽と家庭科の授業を受け持つことになった。

第2節 2年3組フェイせんせー

僕は中学部の2年3組を受け持つことになった。僕は始業式の時に、十五名の生徒に自己紹介をした。最初、全校生徒に挨拶をするのかと思っていたが、この世界（ヴルーベリ男子学院）にマイクなどなかったため、そんな事はないだろう。そう思っていた。が、後日戴冠式を思わせるような、ゴージャスで宗教色の濃い儀式を学院内にある教会でさせられた。当然のことながら、大勢の生徒が見守る中、それは行われた。今からでも引き返せないだろうか？

「今年度からこのクラスのみ体育と美術と音楽と家庭科の4教科を教えることになりました、フェイイルヴェルク・レンフェルトです、よろしく。校長先生もやっています、今のところそれらしい仕事もしていないので、あまりかしこまらず気軽に接してください。」

僕は現在、フレッドの守護妖精をしているが、彼の守護妖精をする前は、フレッドの祖父のジェラルドの守護妖精をしていた。彼の職業は学校の先生だった。まさかこんなところでジェラルドの知識が役に立つとは思わなかった。ジェラルドの死後、僕は彼の知識を吸収したのだ。問題は、ジェラルドが数学の先生であって、体育や美術や音楽や家庭科など、他の教科は教えていなかったという事だった。

生徒が一人ずつ立って自分の名前と他に一言ずつ言った後、自己紹介が終わったので、この教室を後にしようかと思っていた時だった。

「質問！」

僕の不安をかきたてるような明るい声が教室中に響いた。窓際に座っていた男の子が手を上げていた。

「…君、名前は？」

普段はこんなことはないのだが、緊張のせいか生徒の顔と名前を覚えていなかった。

「フロール・シャンフォードです。」

僕は彼の顔を見た。彼は綺麗な金髪をしており、金髪なのは僕も一緒なのだが、彼の顔には見覚えがあった。

「じゃあフロール、質問って？」

「はい。先生は何歳ですか？」

教室中がどよめいた。皆僕を見た時からそれを疑問に思っていたようだ。

「…何歳に見える？」

「十三歳！」

誰かが大きな声で言った。

「いくらなんでも十三歳で校長先生にはなれないよ。先生はこう見えても結構年をとって、本当は何歳なのかは、秘密なんだ。」

当然のことながら、生徒たちの私語はなくならなかった。

「じゃあ先生は結婚しているんですか？」

フロールがまた質問してきた。

「結婚？しているよ。」

ついそう言ってしまった。しかし、次のフロールの質問に僕は凍りついた。

「先生の奥さんってどんな人？名前は？」

まさか『男と結婚しました。フレッドという名前です。』とは言えなかった。いくら男子校の先生だからって大声で男と結婚したとは言えない。こういう時どうすればいいのか？嘘をつくしかない。こうして人は嘘を重ねていくのかもしれない。

「かわいい人かな。名前はアイレーンって言うんだけど。」

最初は『ニコル』と言おうと思ったが、フロールの顔を見て別の人の名前にした方がいいと思った。『アイレーン』は長男のスターリングが男女に分裂した後の女の子の名前だ。スターリングとは近親相姦の間柄になりかけたが、次男が生まれたことをきっかけに彼も親離れしてきた。と、思いたい。そうでなくては困る。

とりあえず自己紹介は無事に終わった。

一週間のうち、学校があるのは4日間で、体育だけが週に2回あり、美術と音楽と家庭科は1回ずつあった。毎日2年3組の皆に会えるというわけだ。

体育の授業は1日目と4日目の朝にあり、1日目はフェンシングで、4日目はテニスにした。体育祭の近く以外の時は何を教えるてもよかったので、自分の趣味で種目を選ばせてもらった。

「じゃあ皆この服に着替えて。」

十五人の生徒はそれぞれ体操服に着替えていたが、僕が今着ている、今日の日のために用意されていた服に再び着替えさせられた。

「先生、何ですか？この服は。」

「バトルコスチュームだよ。これを着ると気が引き締まっていいんだよ。」

「先生が王子様のコスプレをしているのかと思った。」

「王子様はこんな服は着ていません。」

「王子様は先生みたいな顔じゃないしね。」

誰かがそう言って、皆が笑った。そう言ったのはフロールだった。

十五人がバトルコスチュームに着替え終わった。深緑で、硬い襟と、肩の飾りが特徴的な上着と、白いズボンという衣装は、彼らを凛々しく、美しくさせた。惚れ惚れするできだっ

た。その衣装が。

僕は基本の動きを教えた。

「先生、試合はしないんですか？」

「それはもう少し練習してから。」

特にこれといったことはしなかったが、第1回目の体育の授業を終えた。

美術の時間には絵を描いたり、工作をしたりすればいいと思い、その日は隣の人の絵を描くように指示した。

「先生！僕の隣には誰もいません！」

フロールだった。

「どーすればいいですか？」

僕は彼の方に歩いていった。

「じゃあ3人で描けばいいよ。」

傍にいた二人がこちらを見た。

「おいでよ。」

そうは言ったものの、フロールはあまり歓迎されていなく、彼も席を立たなかった。

「先生は絵描かないの？」

「僕は先生だし、皆の出来具合を見て回らなきゃならないからね。」

フロールは軽く笑うと、こう言った。

「本当は絵がうまくないから、描きたくないんだろ？いいよね、先生は。でもそういうのってズルくないかな？」

さっきまでの2年3組の一生徒である彼ではなく、別の顔を見たような気がした。これは僕に対する反抗か。自分と見かけ年齢が大して変わらない妖精に教えられるのがそんなに嫌なのか。

「…もつとき、オブラートで包んだような言い方で、僕も絵を描くように勧められないの？」

フロールは膝の上で大きすぎるスケッチブックを立て、首だけスケッチブックの上から出ているような状態で僕に微笑みかけた。紛れもなく、思い出の中の少年の顔だった。

「先生は正直に僕の絵を描きたいとは言えないの？授業中いつも僕を見ているの、知っているんだよ？」

———ちょっと待ってくれ。僕が君を見ているのではなくて、君が僕を見ているんだろ。

周囲の生徒たちが僕とフロールの会話に注目している。怪しまれないために、仕方なく彼の正面に座り、彼の顔をスケッチし出した。(顔だけ)メルヘンの国に住む、花の妖精に似ているので、サービスで背景に花を描いておいた。

後で皆の絵を見ている時にとんでもない絵を見てしまった。フロールの絵だった。彼が描いた僕は満面の笑顔で、片足をあげ、『こっちへおいでよ！』と誘っているかのように左手

を差し出していった。そしてそれだけならこっちも笑って済ますのだが、背中には蝶の翅がついていた。しかも左下に小さな文字で『君にもあるさ、蝶の翅。そして共に飛ぼう。この大空を。』と書かれていた。…絵本の中の「ページのつもりなのか？

——んな馬鹿な。壊れている。でもどっちが？

僕は放課後、彼を呼び出さずにはいられなかった。

彼はゆっくりと美術室に入ってきた。

「…フロール。」

「何ですか？先生。」

「この絵についてなんだけど。」

僕は彼の描いた絵を提示した。

「…それが何か？」

フロールは手を組み、両手で両肘を触っている。

「何で先生の背中に翅がついているの？」

「何だ、そんなことか。」

彼は両手を下ろし、肩をすくめた。

「そんなの何となくだよ。」

「でもこの左下の文は？」

「翅をつけて描いたらそういう文も一緒に思いついてね。僕って詩人？」

それだけ？それだけなの？本当に？

僕は自分が描いたフロールの絵を彼の前に出すと、スケッチブックを開き、彼の絵の隣の白い部分を下にして、彼の胴体を描いた。そして蝶の翅を描いた。ついでに彼の頭にカチューシャをつけ、カチューシャから触覚を生やした。彼は黙ってそれを見ていた。

彼が無反応なので僕は自分の絵をしまった。彼の絵も下げようとすると、彼が口を開いた。

「君はかわいそうだね。虫籠の中に閉じ込められて、動物小屋に籠ごと閉じ込められちゃつてさ。今にも翅がもぎ取られそうさ。」

思わず唇をかみ締めた。

「用はこれだけだから、帰っていいよ。」

そう言うのがやっとだった。

音楽の時間は僕がピアノを弾き、皆が歌ってくれればいい。そう思い、合唱で使う楽譜を探した。ヴルーベリ家の屋敷にはピアノが置いてある部屋があり、そこに楽譜や、他の楽器もあった。以前フレッドの父親が小さい頃、僕はヴルーベリ家ほどではないが、広い屋敷に引き取られていたことがあり、そこに住む奥さんにピアノを習っていたのだ。普通の人間には無理な話だろうが、僕は妖精なので、楽譜を一目見ただけでその曲をピアノで演奏できた。セヴァスチャンのピアノの腕はいかなものだったかは知らないが、後々僕を校長にさせ

るつもりでいたのなら、僕にピアノの練習をさせるべきではなかったのだろうか？たとえマドレアやフレッドに僕たちの関係を誤解されたとしても、相談くらいはするべきだ。ほんの僅かの余裕のなさを知っているかのように、ピアノの鍵盤は重く、僕がスラスラと弾くのを拒んだ。

「それでは先生が先に歌うので、後について歌って下さい。」

僕は一度通して歌ってからそう指示した。

その歌は僕の知らない歌だったので、マドレアやフレッドに歌ってもらった。フレッドが歌ったところを見るのはこれが初めてで、うれしくもあった。途中からスターリングと未来人も乱入してきて、ちよつとした合唱になった。きつと授業でもこうなるのだろうか。

「先生！」

またフロールだった。

「去年までの先生はまず、発声練習をさせてから歌に入っていました。そうしないといい声が出ないって。先生はそうしないんですか？」

彼は先生いじめをするのが生きがいなのだろうか？

エルリックならいちいち傷ついて、涙ぐんでいるだろう。ニコルは反発しているだろう。だが僕は？どうすればいいのだろうか、どうするべきか？

僕は発声練習からやり直すしかなかった。

「あーあ、フロールの言うこと聞いちゃったよ。」

「先生もかわいそうに。」

「早く授業終わらないかな？」

幾重にも重なる音と音との間に、こういった『心の声』がいくつも飛び交った。だが、フロールの声は聞こえなかった。

家庭科の時間は調理実習をさせた。班毎にひとつの料理を作っていく…。

「先生！」

「またもやフロールだ。と思ったが、同じ班のA君だった。」

「フロールが何もやってくれません！」

結局はフロールに手を焼くことになってしまう。全てのトラブルは彼に繋がっている。僕は彼の傍まで行き、野菜をまな板の前に置き、彼に包丁を持たせた。

「フロール、ちゃんとやりなさい。」

「分かったよ。」

不満そうな声を漏らしつつも、彼は野菜を刻み始めた。僕は安心して教卓の方へ戻った。すると、僕の頭に野菜の破片が当たった。フロールが野菜を切って僕に投げたのだった。

「食べものを粗末にするんじゃない！」

僕はそう言うなり彼の左頬をおもいっきりたたいた。彼の周りの同級生たちが啞然として

いる。

と、なったところでどうしようもなかった。僕は彼を叱りつけることも、殴ることもせず
に無視した。もし彼が彼だとしたら、腹は立つが、それが一番効果的だろう。

一週間は体育に始まって、体育に終わる。まだ一週間しかたっていないのに、僕は疲れて
いた。僕は校長先生であり、2年3組の一部の教科を教える先生でもある。が、ニコルは家
で赤ちゃんのお世話をし、エルリックは印刷所でフレッドと共にお仕事をしていた。

—— 疲れない方がおかし。

テニスは皆経験があるようなので、授業の前半は基本の動きをさせ、授業の後半は試合を
やらせた。僕も試合をやることになるのかと思ったが、フロールは何も言ってこなかった。
体育の授業は無事に終わった。

放課後、僕は教室に誰も残っていないことを確認すると、着替えのため、一人校長室へと
向かった。校長室は教員室とは離れており、学校の中央にある塔の最上階にあった。校長室
まで行くのには、螺旋階段をひたすら上らなければならぬ。最初は誰かいると嫌なので、
ちゃんと登っていたが、誰にも会わないし、めんどくさいし疲れるので、今は螺旋階段を少
し登ったら、校長室まで瞬間移動している。高いことはそんなにいいことなのだろうか。セ
ヴァスチャンがあの年でここまで上ってこれたことを関心してしまう。日々の運動が長寿の
秘訣だったのだろうか。確かにここにいれば学校の全てが見渡せるくらい見晴らしがいいが、
ここから教室まで行くのに10分以上かかるというのは辛い。この校長室はまるで校長と
いう名のお子様ランチを学校から引き離しているかのようだ。僕はここに囚われている。『虫
籠の中』という表現も、あながち嘘ではない。ここに来る人はストロー副校長くらいだが、
彼は新人類だしいい年なので、最近では僕の方から彼に会いに職員室に出向いている。ここ
に来るたび息を切らしている彼を見るのはさすがに申し訳ない。

校長室は一人用にしては広く、子供用のベッドくらいの大きさの机の右側に小さな部屋が
あり、図書室となっている。机は入り口を向いて立っており、背後には学校が見渡せる窓が
ある。学校は上から見るとコの字になっており、正面から見ると凸の字になっている。他に
も図書館や教会や印刷所や学生寮等が校舎の周囲に適当に配置してある。校長室のある塔か
らまっすぐ行ったところに正門があるのだが、そこから林を挟んでヴルーベリ屋敷がある。
木が邪魔をしているが、屋敷の一部がここから見える。

「…先生」

聞こえるはずのない声に驚き、顔をあげると、フロールが中に入ってきていた。

僕は上着を脱いでいる途中だった。

彼は近づいてきた。僕は上半身が裸になっていたもので、まだ暖かい体操服で前を隠した。

「…先生」

ここに来る学生がいるなんて。しかも彼が来るなんて。その綺麗で、何を考えているか分
からない顔に僕は恐怖を感じないわけにはいかなかった。綺麗な人や妖精は多いが、彼の容

姿は僕にとっては特別だった。彼は幼年時代と、メルヘンの国の思い出そのものだった。

「何か用？」

「声が震えているよ？」

思わず口を押さえた。彼はゆっくりと僕の後ろに回った。

「この跡、どうしたんですか？」

彼は僕のあらわになった背中をなぞり、ささやくように言った。

背中に翅や羽が生えている妖精なら誰でも、翅を見えなくさせた時に、背中の翅の付け根の所にアザが見える。

僕は上半身を震わせ、叫びながら机を飛び越えて彼から離れ、床に着地するなり振り返って彼を見た。彼は今にも僕の所に行こうと身を乗り出していた。びっくりしてソファーに足がぶつかり、そのまま姿勢を崩してソファーに倒れた。ではなく、彼に押し倒されたのだ。

僕はどうなってしまふのだろうか？先生が生徒にレイプされるのか？それ以前に男が男に？ヴルーベリ男子学院ではレイプは犯罪だと教えられているのではないのか。それとも同性同士のもはカウントされないことになっているのだろうか。さつき僕は「キャー」と言っていないかっただろうか？長い間分裂してニコルニコルしてきたせいで、男のフェイイルヴェルクの時も心は女のままになっているのだろうか。フロールは僕を女としか思っていないとか。…考えると恐ろしい。

フロールは僕の大好きな金髪の男の子だ。結婚するなら金髪がいいってニコルも思っていて、実際に金髪の彼と結婚した。くりくりした目がかわいい金髪の少年フロールは、僕に襲いかかろうとしている。多分。それより何よりアレなのは、(緊急事態なので『アレ』の説明はなし)何度も言うように、彼がある人物に瓜二つだということだ。でも、もし同一人物なら、僕が彼にいじめられる理由が分からない。

『フレッド、助けて。』

そう思った時、妙に笑えた。もうダメだと思ったのだ。僕は上半身裸のまま、フロールに馬乗りになされ、肩を押さえつけられて自由がきかない状態だ。

「ふ、フロール。何のまねだ。こんなことして許されるとでも思っているの？プラネシアン様が嘆いているよ？」

「うるさいっ！」

彼の目が大きく開いたと思うと、首を掴まれ、捕らわれてしまった。

「うっ」

思ったより強かった。彼のアメジスト色の瞳が怖いほど光を放っている。彼の心は読めなかったが、憎しみの目で僕を見ていることだけははっきりと取れた。

「く、くるしい。」

必死でそう言うと、彼の口元が笑った。

「無様だね。そんなんでよく校長でいられるよ。向いていないんじゃないの？支持率だって

50%未満だし。あんまり僕を失望させないでくれよ、ロビン・レンフェルト。」

『ロビン』というのは、ニコルの本名で、『ニコル』という名前は昔、血のつながらない兄につけてもらった呼び名だった。兄の名は『ナイチンゲール』といい、彼はその名前で呼ばれることを嫌ったため、お互いに別名で呼び合っていた。確か、ナイチンゲールの別名は『ルイ』だった気がする。

「…離してよ…ルイ。」

僕は必死で首に巻きついた彼の両手を剥がそうとした。

「今はフロールという名前だ。」

「…やめてよフロール。お願いだから…僕をつぶさないで。」

「何だよ、それ!」

彼は両手を離し、馬乗りになっている状態から立ち上がり、ソファアから降りた。

僕はソファアから転げ落ち、首を押さえて咳き込んだ。苦しさが消えて起き上がると、彼が投げた着替えが頭の上に乗った。フロールに顎を軽く持ち上げられ、頭の上の服が床に落ちた。と、同時にフロールの唇が僕の唇と重なった。僕はその星の輝きが宿った瞳に釘付けになってしまっていて、動けなかった。キスしていた時間は1分もなかったはずなのに、そのほんの数秒で兄と過ごした約1500年の記憶が呼び起こされた。僕の誕生の瞬間から、彼の最期の瞬間まで。

「フェイ。僕は消えるんじゃない。生まれ変わるんだ。」

彼はそう言っていた。

第3節 ニコル、休む

その日の夜、僕がニコルとフレッドの寝室に入ると、フレッドはだいたいぶ前にベッドの中心にいて、本を読んでいた。ちなみに『セヴァスチャンの日記』ではない。

彼は僕を見ると、本を畳んだ。

「改めて言うけど、先生のお仕事お疲れ。どうだった？」

僕はしばらく黙っていたが、この沈黙は彼を不安にさせた。

「何で黙っているの？」

「いや。先生のお仕事は大変だったよ、慣れなくてさ。」

僕はそう言って彼のベッドの中に入った。

「フェイ？」

「何？」

「…別に。」

「…う言いたいんだろ?』どうしてニコルの姿でベッドの中に入ってこないんだ。何でフェイの姿で入ってきたんだ。』って。

僕は仰向けに横になって、天井を眺めた。ベッドには天井がついていて、星空を泳ぐ魚の絵が描かれていた。気持ち悪い目をした魚だった。幸運にもこのベッドの中で六連の夢を見

たことはなかったが…。

「あのさ、ニコルは？」

「ニコル？彼女はお休みだよ。」

「お休み？」

フレッドは僕が何とも思っていないような声で話しているので、途方にくれていた。彼は僕を見たり、目を逸らしたりを繰り返して、まともに僕を直視できなかった。しょうがない、僕は今まであまり表には出ていなかった。しかも扱いにくい。もし僕の取り扱い説明書を書くとしたら、まずエルリックから描き始めるだろう。彼は入門編だ。ニコルが基礎編となり、僕は応用編だ。僕と彼ら（ニコルとエルリック）はそれぞれが別の人格であり、それぞれが別の考えを持っている。一人の人の中に、幾つもの人格が存在することを『多重人格』と言うが、それが人格だけでなく、外見も変わってしまうのが僕たちの種族である。僕とフロールは共にこの種族だ。ああフロール、この世界には僕と君の二人だけが存在するわけじゃないんだよ、僕はもう結婚している。隣で横になっている人とね。

「フェイも疲れているんだね。一人三役だもんね。じゃあしばらく休んでいるといいよ。でもさ、赤ちゃんはどうするの？」

「赤ちゃん？スターリングがいるじゃん。」

「スターリングが預かっているの？マドレアのところじゃなかったんだ。」

「ああ、それでもよかったんだけど、スターリングにベビーシッター代前払いしちゃったんだよね。」

フレッドが僕の顔をにらむように見てくるので、僕は顔を逸らした。

「ちよつと、フェイ！」

フレッドは僕の肩を揺すった。

「なに！」

僕は機嫌悪そうに言った。今すぐにも寝たいみたいに。

「どういうこと？もしかして、育児放棄？しばらくニコルに戻らないつもりでいるんじゃないだろうな？」

エルリックはどうでもいいのか。彼はこれでも仕事仲間なのに…。

「そのうち戻るよ。」

「そのうちって何時？」

僕はうつぶせになり、両手を枕の上に出した状態で横たわった。

「フレッド、僕はもう疲れたよ…。」

「こらっ！」

フレッドは僕を起こそうと揺さぶり始めた。週末の夜で、明日は休みだというのに妻とSEXできないのがそんなに嫌なのか？そんなに僕じゃ嫌なのか？

「やっつけてほしいなら、いつでも言っつて？」

僕はふにやふにやになりながらも言った。

「やってほしいって、何を？」

「フェラチオ。」

フレッドは噴出し、僕に枕を叩きつけ、背を向けて眠ってしまった。

こうして、しばらくの間、僕は分裂してニコルとエルリックになることはなかった。仕事
中はエルリックと共同作業をし、寝るときはいつもニコルと一緒にだったフレッドは、家族の
中で一番ショックが大きかった。さすがにかわいそうなので、毎晩僕と一緒に寝てあげた。
あまり喜ばれていなかったが、これも試練だと思う。本当は彼にフロールのことを忘れさせ
てもらいたい。しかし残念ながら、SEXして忘れられるような単純な問題ではなかった。

第4節 グロゲロプリンセス

2年3組を受け持って数週間が過ぎた。フロールは自分の存在を僕にアピールするためだ
けに事件を起こし続けた。彼は他の先生にもそうしているのか聞いたが、僕だけらしい。他
の生徒に不振に思われてもいいのだろうか？彼に愛されている自分が恥ずかしい。しかも彼
の愛は凶器にしか見えない。僕が知っている彼はこんなではなかったはずなのだが…。

ある日ストロー副校長が校長室に来た。

「こんにちは。あなたの噂はいろいろ聞いていますよ？」

ゲ。もう少しでそう言うところだった。

「どう？僕の支持率は。」

「支持率？そんなものが低くても教師を首になった人はいませんよ。それほど重要な教科を
教えている訳でもないですしね。」

フェアリーランドの（都会の）学校には支持率というものがあり、いわばそれが先生の通
信簿だった。支持率が30%以下の先生は、自動的に首になった。なので先生になる人は頭
がよいだけではなく、教え上手で、ルックスや性格もそれなりによくなってはいけなかった。
だがここ、ヴルーベリ男子学園では、生徒の規則はきちんとしているが、先生の規則は比較
的おだやかで、僕のような素性の知らない者や、ストローまで上に立つことができた。…ス
トローは関係ないか。

「そんなことより、初学部と中学部の学生には学芸会をやってもらおうことになっているん
ですが、あなたのクラスの出し物はもうお決まりですか？」

「は？」

「職員会議で2年3組の学芸会に向けての指導はあなたが受け持つことになったんです。」

——聞いていない。職員会議なるものがあつたという事実さえ知らされていなかった。
（一応）校長である僕だけを仲間外れにし、他の先生全員で集まって決めたというのか？

後で知ったのだが、職員会議の時間、僕はフレッドのところに行った。印刷所で彼がエルリ
ックなしでどこまで奮闘しているか、見に行っていた。本人には嫌がられたが、エルリック
がいない状態にも慣れたようだ。…必要ないなら寂しいが、ストローは会議前に校長

室に顔を出したそうなのだが、僕は校舎から少し離れた印刷所にいたため、勝手に会議を始めたらしい。

何故かは知らないが、この学校には、責任者としてクラス一つを受け持つ先生がいなかった。別に2年3組の担任になりたいわけではないが、僕以外に学芸会の指導を任せられる先生はいないのだろうか？これではまたフロールにいじめられてしまう。僕は今まで誰かにいじめられたことはなく、いじめられキャラだとは思わなかった。

『君をいじめていいのは僕だけだよ』
フロールなら、そう言いかねない。

僕はどんな話を劇にすればいいのか、放課後に学級会議で決めることにした。
誰もどういった話がいいのか、言ってこなかった。長い沈黙の後、フロールが昔話を始めた。

「昔々、ある商人の所に三人の娘がいました。娘は三人とも美人でしたが、中でも末の娘のロージーが一番美人で、誰からも愛されていました。商人の妻は最近亡くなり、妻は亡くなる前にこう言いました。

「娘をもらいたいという方がいたら、どんな身分の人でもかまわず嫁に出しなさい。」

一年後、お金持ちの人が長女を是非嫁にしてほしいと言ってきました。長女は喜んでそのお金持ちの家に嫁に行きました。

そしてさらに一年後、商人の家にこれもまたお金持ちの人がやってきて、次女を嫁にほしと言ってきました。次女も大喜びでお金持ちの家に嫁に行きました。

さて、商人の子供で残ったのは、末の娘のロージーだけでした。彼女は自分もお金持ちの人と結婚できると信じ、未来の旦那さんを待ち続けました。しかし、一年たっても二年たっても旦那さんは現れず、三年の月日が経ちました。

世間ではロージーがいつまでも結婚できないことが噂になっていました。父親も何とかしてかわいい娘を嫁に出せないか悩んでいましたが、一番辛かったのはロージーでした。

ある日、ロージーが池のほとりで泣いていると、池に住むカエルが彼女に話かけました。

「ゲロゲロ、お嬢さん、ゲロゲロどうしてそんなに悲しそうに泣いているんですか？ゲロゲロ。」

ロージーは泣きながら言いました。

「私の二人のお姉さまはお金持ちの方と結婚して、それぞれ幸せに暮らしています。なのに三姉妹の中で私だけが結婚できないのです。」

カエルはそう言うと、飛び上がって言いました。

「ゲロゲロ、お嬢さん、ならば私と結婚しましょう。ゲロゲロ、私はこんな姿をしています。が、本当はエトワールの国の王子なのです。第一王子である私の地位と美貌に嫉妬した継母が魔法使いに頼み、私をこんなカエルの姿に代えて、実の子を王様にしてしまったのです。ゲロゲロ。」

ロージューはカエルの言っていることを信じようとはしませんでした。

「カエルさん、悪いけど私はお父様がいいと言った方としか結婚できないの。」

ロージューはそう言っただけで家に帰った。

帰ってくるなり、父はロージューに抱きつき、言った。

「どこに行っていたんだ、ロージュー。今日はおまえにお客さんだよ。ついにおまえをもらってくれる人が現れたんだよ。」

ロージューは期待に目を輝かせました。

「ゲロゲロ、ロージュー！！」

カエルがロージューの胸に飛びついてきました。ロージューはあまりのショックに気絶してしまいました。

その夜、ロージューが目覚めると、ベッドの脇の机の上でカエルがしょげくりかえっていた。

「カエルさん。お父様は何て言ったの？」

「あなたに娘をあげますって言いましたよ。ゲロゲロ。」

「そんな！」

ロージューは声を張り上げて泣き出しました。

「ゲロゲロ。ロージュー、そんなに悲しまないで下さい。ゲロゲロ。」

「それが悲しまないでいられますか！」

「ゲロゲロ。あなたが本当に私を愛してくれる日がくれば、私はエトワールの国の王子になれるのです。ゲロゲロ。」

ロージューはそれでも泣くのをやめなかった。

「エトワールの国の王子様、教えてください。あなたは神の祝福を受けた金髪をしていて、容姿はこの国の王子様よりも素敵で、その輝きには太陽さえ色あせて見えると言われた、あのエトワールの国の王子様本人なのですか？」

「ゲロゲロ。そうです。ゲロゲロ。もし私を元に戻すことができれば、あなたは世界で一番幸せな王妃様にまれますよ。ゲロゲロ。」

ロージューは仕方なくカエルと結婚式を挙げ、父や二人の姉の祝福も受けましたが、カエルとキスするのだけは嫌がりました。そして、夜寝る時も、自分の体を這い上がるカエルが嫌でたまりませんでした。しかし、そんな彼女もカエルの優しさに心を打たれ、じょじょにカエルになれていきました。そして約一年後、ふたりに子供が誕生しました。元気な男の子でした。ロージューは子供がカエルではなく、人間の姿で生まれたので、喜びました。そして、旦那さんに赤ちゃんを見せてあげようと屈んだ瞬間、赤ちゃんが手からすべり落ち、赤ちゃんを助けようと手をのばしたカエルは、下敷きになってつぶれてしまいました。

赤ちゃんは助かりましたが、つぶれてしまったカエルを見て、ロージューは大粒の涙を流し、そっとカエルにキスしました。するとどうでしょう！つぶれたカエルの体から光がこぼれ、

中からエトワールの国の王子が出てきたのです。

こうして王子とロージは、共にエトワールの国に行き、継母と王を国外追放した後、王子は誰からも慕われる、すばらしい王様となり、ロージは誰もが羨む、幸せなお妃様になりました。二人は年老いた父を大切にし、たくさんの子供たちと共にエトワールの国でいつまでも幸せに暮らしました。✧

で、彼はこの童話と童話をつなぎ合わせて作ったとしか思えないお話を学芸会で演じて欲しいのだろうか？この教室にいる人なら皆そう思ったに違いないし、現に思っている。他にも学芸会で演じたい話があるかどうか聞いたが、いつまでたっても誰一人、新しい案を思い浮かばなかったので、2年3組は、『デロゲロプリンセス』（このタイトルはどうかして欲しい！）を演じることになった。

「じゃあ、王子様役はフロールがやるってことにして、他の役はどうしようか？」

僕には彼が王子様をやりたくてこの物語を語ったとしか思えなかった。

彼はチラッとこつちを見るなり、手を上げて立ち上がった。

「先生！僕が何時『王子様を演じたい』って言ったんですか？」

——そう言うと思った。

「このクラスで王子様と同じ金髪なのは君と僕だけだ。君が王子様をやるべきだね。」

皆がざわめいた。残念ながら、彼らの中で王子様をやりたい人はいなかった。ロージ役は冗談でもやりたがらなかった。

「分かりました、僕がやります。」

君は最初から王子様をやりたかったんだろ、フロール。他のクラスメイトは騙せても僕は騙せないよ。

「その代わり、ロージ役は先生がやってくださいね。」

「おおっ！」

ざわつきは一層大きくなった。

「ちよつと待ってよ、何で先生である僕がロージを演じなきゃならないの？」

「先生が舞台に出たらいけないって決まりでもあるんですか？僕は先生だけ見物しているのはズルイと思います！」

「そうだそうだ！」

フロールの一見もつともらしい意見に、皆が同調した。ただ、ロージ役だけはやりたくないという理由だけで。

B君が言った。

「先生はフロールのことが好きなんですか？」

「は？」

何でこんな事をここで聞かれなくてはならないのか？

「好きなら二人のラブラブっぷりを舞台上で披露すればいいと思いまーす！」

こんな風に皆の前でフロールとの誤った関係を指摘されるとは計算外だった。本当に、勘弁してほしい。僕は彼のことは兄としか思っていなかったのに…。

「ちよつと待ってよ、B君！僕は確かにフェイ先生のことを好きだよ、それは認めよう！でも彼には奥さんがいるし、これは僕の片思いでしかないんだよ。だから僕はもし自分が王子様になるなら、お姫様役はフェイ先生がいいって思ったんだ。そうだよ、僕は舞台の上だけでも先生と愛し合いたいんだ。現実には無理だからね！先生、僕今まで意地悪ばかりしてきたけど、これも皆先生が好きだからなんだ！」

彼は熱く自分の想いを告白してきた。皆、フロールを笑ったり、恥ずかしがったり、軽蔑したりしているが、誰一人僕の視点でものを見ていない。僕はさっきから窒息しそうだし、気絶しそうだ。生徒と見分けがつかないばかりに、他の男よりも女らしく見えるというだけで、恋愛の対象にされてしまう自分が恥ずかしい。常にフロールの手中にある自分を感じる。頬を一滴の汗が流れ落ちる。フロール、僕は何時から弟から性の対象になったんだ？

僕が言葉を失っている間に、フロールが前に出てきて、誰が他の役をやるのかを勝手に決めてしまった。不思議と誰も反対しなかった。軽く催眠でもかけたのだろうか？目に見えないが存在する蝶の翅から粉を出して。彼はカエル役もやると言い張った。ただ僕と絡み合いたいのが為に。ねえ、フロール、これは悪い夢だよ？しかし、彼の自信たっぷりな目は『フェイ、これは夢じゃない。本当の話なんだ！』と言っていた。僕が困惑した顔を見るのはさぞかし楽しいだろう。僕は感情を表に出すタイプじゃないからね、ニコルと違って。

放課後僕はフロールと教室で二人っきりになった。

「フロール、これはどういうことなの？」

先生と教え子が関係を持つというのはここ（ヴルーベリ男子学院）では許されるのだろうか？ジェラルドはかつて、教え子であるキャロラインと関係を持ち、非難されつつも彼女と結婚をした。本当はニコルと結婚するはずだったのに、教え子とSEXして子供まで作ってしまった。ニコルは彼の息子と恋に落ち、事故さえ起きなければきっと結婚していた。結局ニコルはジェラルドの孫と結婚することになって、最近二人目も生まれた。それなのにここにきて問題が生じた。フロールが。いや、ナイチンゲールが目の前に現れて、嵐を起こして暴れている。

「フロール・シャンフォードというのはね、僕の大好きな妖精の名前でね、ロージーというのは僕がずっと好きだった妖精の名前なんだ。」

——いきなり何を言ひ出すんだ？

「他に好きな妖精がいるなら、何で皆の前で僕に愛の告白なんかしたの？おかげでこっちはすごく恥ずかしい思いをしたんだよ？」

「僕は確かにロージーが好きだった。でも今は君しかいない。ロージーはどうでもいい。ロージーは君と会うきっかけをくれただけなんだよ。」

「僕はロージーなんて知らないよ。誰？ロージーって。」

フロールは首を左右に振った。

「今は言えない。」

分からない。彼は僕の秘密を何か知っているのだろうか？

「ねえ、君は僕との関係がうわさになって楽しいの？僕が校長を首になればいいって思っているの？それとも君が退学したいの？」

「それもいいかもね。」

「よくないよ！何が目的なんだ。」

「知らない。自分で自分分からないよ。」

「何だって？」

「だって僕は君と結ばれる運命になると思っていた。なのに君は僕を裏切った！」

ちよつと待ってくれ、フロール！少しは立ち止まってよく考えてくれ！

彼は震えていた。そしてキラキラ光る雫が床に落ちた。そしてシャッキリをあげたと思うと、消えてしまった。自分の感情がコントロールできなくて、いたたまれなかったのだろうか。それとも僕に泣き顔を見られるのが嫌だったのか。

第5節 ルール

フェンシングの授業で使っているバトルコスチュームは、フェアリーランドの祭典の時のパレード等で使われる衣装を参考にして作ったもので、普通はその衣装で楽器を演奏しながら行進する。女性の場合上着は同じだが、ミニスカートをはいている。僕はニコルとエルリックに分裂し、彼らはそれぞれ3人ずつ分裂し、スターリングも同様に、6人に分裂し、それにミクヒトとマドレアとマリーナが加わり、15人分の衣装を短期間で作り上げた。

「今日は試合をやりたいと思います。まず、左胸のエンブレムを外してこのクマちゃんを取り付けてください。試合中、このクマちゃんを先に剣で落した方が勝ちとなります。途中で取れても負けとなります。」

「クマちゃんって何だよ。」

「そう言う声が聞こえた。」

「じゃあまず先生が見本を見せます。」

と、言うなり、フロールが前に進み出た。

待ってくれフロール、君とは戦いたくないんだ！…負けるから。

しかし、彼の動きはそれほど早くなく、素早く足を動かし、かわすことができた。僕にフェンシングを教えてくれたのは彼で、当時は彼には勝つことがなかったが、彼のクマに届が届き、彼のクマは先に落ちた。誰かが拍手をした。彼はとたんに目つきが変わり、僕の胸を突いた。

「痛いっ！」

彼の剣を握り、彼から剣を取り上げた。

「勝負がついた後に攻撃しても意味はないよ。」

「意味？そんなものは必要ないよ。」

僕の胸からクマちゃんが落ちた。首が取れていて、中から白い綿が覗いていた。

第6節 ニコルで…

劇の練習は進行中で、台詞はだいたい覚えた。ただ、フロールと抱き合うシーンがなかなか決まらなかった。僕は学芸会の指導をする先生のはずなのに、なぜか生徒Cがやたらと注文をつけてくる。彼は演劇にうるさいようだ…。

僕は休憩時間に彼に相談した。

「フロール。僕はやめた方がいいんじゃないかな？」

「そうだね。フェイはダメかもね。」

—— はっきり言うな。

「ニコルになりなよ。フェイじゃ決まらないって。」

「そう？でもさ、衣装を着て練習する時と、本番とで顔があらさまに違っていることを指摘されたらどうするの？」

そう言うと、フロールは舌打ちをした。

それはやめたほうがいい。

「みなさーん！聞いてください。先生はこの学校に来る前にはどこで働いていたと思いますか？」

休み時間が終わると、フロールは大声でそう言った。皆一見興味なさそうにしていたが、顔は彼の方を見ていた。

「先生は、旅芸人の一座で働いていて、十三の顔を持つ怪人と称されていました。彼は今日までフェイイルヴェルクという顔しか僕らの前に出しませんでしたが、今日はもう一つの顔を皆にお見せしましょう！ニコルという顔を！」

「おおっ！」

ちよつと待った。僕は彼に無理矢理教卓の陰に連れて行かれ、分裂するように言われた。

「それでは皆で呼んで見ましょう！にーこーるー！」

「にーこーるー！」

中にはどうでもよさそうな声もあったが、それでも2年3組の皆はノリがよかった。僕は分裂し、ニコルだけみんなの前に出て、エルリックは瞬間移動で屋敷に帰った。

「に、ニコルです。」

なんちゃってね。こんなドツキリをやってごまかせるとでも思っているのだろうか。

「女の子？」

「声まで変わっている！」

「イリユージョンだ！」

皆がニコルに寄ってきた。

「ダメっ！」

フロールが皆をさえぎった。

「彼女は僕のものだ！」

「でも本当は男なんだろう？」

生徒Dが言った。否定はできない。たとえ分裂して男女に分かれることができて、元々は男である。男と結婚するのは変なのかもしれない。

ニコルの姿で練習するようになってから、皆の劇に対する思い入れが変わった。姉役のE君とO君も（E君はフロールになるのだが）恥ずかしがらずにやるようになったし、役についていない生徒も先に帰らずに練習を見物していた。王子様役のフロールはとげとげしさがなくなり、優しくなった。そう、やさしく抱きしめて…くれて…放さない。しかも皆の前で堂々と。後々陰でどんなことを言われるかも気にせずに。気のせいか、背後にたくさん薔薇の花が見える。瞳の中に星をキラキラさせて僕を見つめないでくれないかな？

「素敵だよ、ロージー。」

「ああっ、王子様。私の王子様！愛していますわ！」

最後は舞踏会のシーンで終わることになっており、役のなかった生徒も男役か女役に別れ、王子とロージーを囲んでダンスをする。そして中央で王子とロージーはキスをする。

まさかとは思うが、本当にキスをされるとは思わなかった。また、彼にキスをされてしまった。

「キスはやめた方がいいよね？」

僕が言うと、

「大丈夫、キスは挨拶代わりです。」

という力強い返事が返ってきた。じゃあ君たちもダンスのパートナー同士でキスする？ 小さい頃はナイチンゲールにキス以上のことはされなかった。あの頃は一つ知らなかった。ナイチンゲールには宝物のようにされていた。ニコルは色々な衣装を着せられて、彼の着せ替え人形だった。あの頃は兄を変態だとは思っていなくて、彼が初恋だったし、彼に愛されることが何よりの喜びだった。しかし、今になって自分への恐ろしいまでの執着心が浮き彫りになってきているのを知った。体がバラバラになり、元に戻る間ずっと僕のことを考えていたのか？この血のつながらない弟を。

衣装や背景は家庭科と美術の時間や、放課後に作った。ダンスで使う衣装は家にあった（おそらくセヴァスチャンが大事に保管しておいた）ものを使用した。女役の子はやたらと胸をつけたがっていたが、踊っている途中でよく胸がずれ落ちていた。そこでマドレアやエレンにブラジャーをかせてもらおうと頼んだのだが、硬く拒否されたので、作るようになった。何故か男子校の家庭科の時間でブラジャーを作る2年3組の生徒。…傑作だ。

この劇で僕は急速にクラスの皆と溶け込んだ。これもヒロインパワーなのだろうか。フロールはすっかりナルシストのナルオ君と化してしまっただけ、彼と僕の謝った関係も(2年3組の中で)公認となり、フレッドの耳に入るのも時間の問題となった。僕は夫にはフロールのことを隠し通すつもりでいる。それではだめだろうか？残念ながらそれを相談する人はいなかった。僕とニコルとエルリックで話し合おうか？

劇はすぐに終わった。2千年以上生きている僕としては些細な出来事だ。ただフレッドには劇に來ないように言っておいた。

「行かないけど。どうせ僕は見れないよ？在校生じゃないし、フェイみたいに先生やっているわけじゃないしね。」

ヴルーベリ男子学院が閉鎖的ではなかった。セヴァスチャン万歳！

劇は1位ではなかったが、特別賞を受賞した。ある意味特別賞だったんだと思う。カエル姿のフロールがニコルにベタベタまとわりつく姿はひんしゆくを買い、だからこそ王子様の彼に心を動かされたのだと思う。誰もニコルが本当の女だとは思わなかった。ロージー役のニコルには胸がないが、他の女には胸があったからかもしれない。劇は大成功だった。それ以外の何者でもない。僕は実際に彼とラブラブになっていたわけじゃない。彼に少しい夢を見させてあげただけだ。そう自分に言い聞かせ、帰宅することにした。

第7節 ご指名ですって

屋敷に帰って階段を上がり、ニコルとフレッドの部屋に行く途中、客室からマドレアが急いで出てきた。

「フェイ、ちょっと来てくれる？」

彼女は右手をすばやく動かして手招きをしている。なぜか頬が赤くなっている…。

「何？」

僕は彼女に背中を押され、客室の中に入った。部屋では、六連とディオオーネがテーブルのところでお茶を飲んでいた。マドレアはドアを軽く閉めると行ってしまった。

「やあニコル、元気だった？」

「今はフェイイルヴェルクだけど。」

僕はわざと不機嫌そうに言った。

「でもすぐにニコルになるだろ？君を指名したんだからさ。」

「は？」

目の前が真っ白になった。何を言い出すのか？

「変な冗談はよしてよ。」

「それは君の方だよ。聞いたよ、ヴルーベリ男子学院の校長先生になったんだって？その上2年3組の体育と美術と音楽と家庭科を受け持つことになって、しかも教え子の一人と関係を持つちゃって今日の劇でニコルの姿で彼と抱き合っけキスしたんだって？」

な、何でそれを？何で彼が知っているの？何か恐ろしく不可解なことが起きているんだだけ

ど。ディオオーネが六連の傍で笑っていた。

「目的は？」

僕がそう言うのと六連は笑った。

「君が織り出す恥蜜をいただくと思ってね。」

「ふざけるな！」

僕は机を叩いて言った。

「君は僕の秘密を知って喜んでいるかもしれないけど、こんなのは君らに比べたら秘密の中に入らないよ。ただ兄としか思っていないかった妖精が僕のことを忘れられなくて追いかけてきただけだ。それだけだよ。」

僕は何も悪いことはしていないんだと、自分に言い聞かせるように言った。

「そんなことで恥蜜を出すわけがないだろう。」

六連は何も言っていない。僕は怒りを抑えることができなかった。

「もしかして、マドレアにも何かしたんじゃないだろうな？」

「マドレア？」

彼は思い出したかのに言った。

「そう言えば彼女がお茶をついでくれた時に、彼女の手を掴んで2言3言言ったら顔を赤くして出て行っちゃったな。」

最低だ。

「六連は姮娥とやっついていればいいんだよ。」

「嫌だよ、あんな穴の開ききった女。それに比べニコルは縮まっている気がするな。しかも未だに恥蜜の威力が夫に効いているところを見ると、催淫効果も期待できそうだよ。」

「だから六連とはやらないの！」

彼は軽く笑った。そして目をギラギラさせて言った。

「君は僕とやりたくないかもしれない。でもニコルは分からないよ？わざと嫌そうに犯されるのは、相手を本気にする為の彼女の戦略だからね。それにいざとなったら君の又を切り裂いてでもやらせてもらうよ？」

僕はいつの間にかこんないけない世界に足を踏み入れてしまったのだろうか？思わず肩が震えた。

「こんなことがあっていいのだろうか？これは夢だ。ねえ六連、夢だよねー！」

僕は彼に近づいて彼のティーカップを取り上げ、彼にお茶をかけようとしたところを止められた。僕は彼に紅茶をかけようとし、彼はそれを阻止しようとし、力比べになった。空中で止まったティーカップは、ディオオーネに取り上げられた。

六連は軽く息をついて、指にかかったお茶をふき取った。

「まあ冗談はさておき。君の恥蜜はすごい額で売れるということが最近になって分かったんだよ。」

「それは僕のに限らないだろう。」

「そうだけど。うまくいけば儲かる話だったんだ。」

まったく、どうしようもない男だ。しかも彼は本気で僕を誘っているように見えた。一瞬でも彼に犯されている自分を想像してしまったし。

第8節 これで元通り

今に始まったことではないが、最近フロールとはよく目があう。その都度彼の瞳の中にある星がきらめく。彼はアメジストの瞳をキラキラさせながら、恋する瞳で僕を見ていた。はるか昔の、僕と一緒にだったころを思い出しているのだろうか。しかし、残念ながら僕は君の想いに答えることはできない。学生の特権である長期休暇の前に、僕は彼を呼び出した。校長室でもよかったが、教室にした。

「フロール。今まで言おう言おうと思っていたんだけど、僕は君の想いには答えることができない。僕は結婚しているし、子供もいる。おまけにこの世界の常識では先生は生徒と関係をもっちゃいけないし、同性愛も一般的とは言えない。君のやっていることは校則違反だ。もし校則違反になっていなかったら、僕が新たな校則を書き加えることにする。僕が校則だ。生徒は先生とは関係をもっちゃいけない。授業妨害も禁止。

僕も君が好きだった。でも終りにしよう、フロール。いや、ナイチンゲール。僕は君を選べない。僕たちはそういう運命なんだよ。」

彼は黙って聞いていた。そして、口元を震わせて、やっとのことでもう言った。

「二度目の出会いは、いらなかったね。」

ごめんね、君をがっかりさせて。僕は一度に何人も恋人を作れるような器用な妖精ではないんだ。誰とでもSEXできるわけじゃないし、誰でも受け入れられるわけでもない。

「ごめんね、君をがっかりさせて。」

それだけ言って僕は教室を後にした。

やっとな2年3組から開放された。残念ながら休み中も学校に行かなきゃいけないけど、肩の荷が下りた気がする。

僕は久しぶりにニコルとエルリックに分裂した姿で家族の前に現れた。

「ずっとフェイのままでもよかったのよ？」

とエレンは言っていたが、フレッドは複雑そうな顔で僕を、ニコルを見ている。僕は満足がいくような説明ができなかった代わりに、謝っておいた。彼は簡単に僕を許すつもりはなかったが、彼の体はいつもよりも熱くなっていた。彼は同性愛とかの存在を否定していて、僕ではなく、ニコルと結婚したと自分に言い聞かせている。だから彼が僕やエルリックを抱くことはない。そこが彼の寂しいところでもあるし、受け入れなければならないところだと思っている。

六連とディオオーネはまだいたが(彼らはここをタダで泊まれるホテルと勘違いしているのだろうか?) 悩み事がひとつ消えたので、大目に見てあげた。

第9節 フロール、どうしちゃったの？

休暇に入って一週間ほど経ったある日、マリーナが廊下をばたばた走る音が聞こえてきた。
「フェーイ！フェーイ！お客さんだよ！！」

僕はピアノの練習をしていたが、部屋から出た。廊下で六連と鉢合わせし、彼も一緒に下に降りてきた。

「何か用？」

「いや、ちよつとね。」

僕は彼を止めずに玄関の扉を開けた。すると、外にはバトルコスチュームに身をつつみ、フェンシングの授業で使っている玩具の剣ではなく、本物そっくりの剣を2本持って立っているフロール・シャンフォードがいた。くまちゃんはつけていないが、首に大きなスカーフを蝶結びにして巻きつけている。かなりキザだ。

「フロール、どうしたの？急に。」

「別に。上がっていい？」

「あ、うん。」

彼を通すと、彼はチラッと六連を見、ダンスホールの方に向かった。

「ねえ、明かりつけてくれる？」

彼は大きな声で言った。僕は仕方なく、ダンスホールの明かりをつけた。

「何しに来たの？」

「もちろん、決闘しに来たんだよ。あの後ずっと考えていたんだけど、どうしても納得いかなくてね。決闘で決めたらいんじゃないかなって思ったんだ。僕が勝ったら君は僕のものになって、君が勝ったら僕はあっさり諦めよう。それでいいかい？」

「よくない。よくないよ。僕が君に勝てるんでも思っているの？」

「ねえ、その勝負ちよつと待ってくれる？」

背後から六連が顔を出した。

「誰だお前は！」

フロールの声がイラついている。

「僕はニコルの愛人だよ。」

「嘘つくな！」

僕はその場で飛び上がった。

「と、いうのは冗談で、その勝負なんだけど、もし僕が勝ったらニコルを好きにしているの？」

「お前には関係ないだろ！」

「それがあるんだよ、彼女をものにする自分の肉奴隷にできるだけじゃなく、金儲けまでできるんだよ。」

「きさま、ニコルをそんなものに使おうとしているのか！」

六連はこの前の悪い冗談を言っていたが、フロールはそれを本気にしてしまい、今にも彼の頭上の火山が噴火しそうだ。

「君だって同じだろ？結局はニコルを自分のものにしたがっている。」

「うるさいっ！ぶっ殺してやる！」

彼は剣を抜くと、六連に襲い掛かってきた。

「危ないっ！」

六連が瞬時にバリアーを張り、フロールは弾き飛ばされ、2, 3歩飛んで、着地し、滑って手をついた。

「バリアーなんか張るなよ。武器を持ってやれ。」

フロールはもう一本の剣を下に置くと、前に滑らせて六連に渡した。彼は剣を取ると僕に渡した。

「何で？」

「僕は剣の練習なんかしたことがないからね。これは君が使いなよ。僕の武器はこれだ。」

そう言うと、彼は上着から黒いものを取り出し、床にたたきつけた。

「げっ。げろげろ。げろげろ。」

僕はカエル役ではなかったが、条件反射的にそれを見てゲロゲロ言った。

「まあ鞭とろうそくはSMの定番だけど、どうして僕がこんなものを持ち歩いているかと言うと…」

彼は鞭を片手に語りだした。彼はこんなものを携帯している事を正当化させようとしている。

「しかもこれは電流が流れるタイプなんだ。」

思わずフロールがひるんだ。六連はフレッドの兄の守護妖精だった。僕はフレッドの兄のことはよく知らないが、きわどいキャラだったのだろうか？

「そ、それでも僕は、フェイを、ニコルを諦めるわけにはいかないんだ！」

フロールは六連に突っ込んでいった。

どうでもいいけどエルリックは？

フロールが剣を振り下ろすと、六連は鞭で剣を弾き飛ばした。剣と鞭では鞭の方が有利なような気がした。ただ、六連が鞭を自在にコントロールできるかどうかは謎だ。フロールも六連も危なくなったらバリアーを張った。これではいつまでたっても勝負がつかなかった。急に六連が傍によつてきて、肩を掴まれ、押され、僕は彼の言われるままにしゃがんだ。

「ニコル。」

彼は、耳元で囁いた。…何か囁き声からしてヒロインですけど。

「フェイルヴェルクだよ。」

「分裂しなよ。」

「え？」

「分裂すれば彼も落ち着くと思うんだけど。」

「…いや、ダメだと思う。」

「やってみなきゃ、分からないよ。ほら、股を開いて。」

六連が僕の両足首を掴んできた。

「やめてよっ！」

僕は足をバタつかせ、彼の手から逃れた。

「こら、僕を無視していちやつくな！」

フロールの剣が僕と六連の間を引き裂くように入ってきた。六連はうまく逃げることはできなかったが、僕は後ろに転がった。

「いちやついてなんかいないよ。」

体を起こしつつ、言い訳をすると、六連は

「いちやついて何が悪い！」

と彼を怒らせていた。

「魚の分際で！串刺しにしてやる！」

フロールが瞬時に六連の背後に回り、本気で彼を刺そうとすると、

「君こそ、電気ショックで焦げたハエにするよ？」

六連は後ろを向いたままだったが、意思の力で鞭を動かし、鞭は彼の剣に巻きつき、剣が刺さるのを止めた。軽く電流が流れた。フロールはビククリして剣を落とした。

「イタッ！」

彼は左手で右手首を押さえた。

「フロール！」

僕は彼に近づこうとした。すると、六連に襟を掴まれ、思わず後ろに倒れ、尻餅をついてしまった。

「何するんだよ。」

「ニコルは奴に近づかない方がいい。連れて行くつもりかもしれない。」

六連が何時になく真剣な顔をしているから、ドキッとした。…恋の予感ではない。

フロールは剣を掴もうとした。すると、六連の鞭に邪魔され、剣を落としてしまった。そして、再び剣を拾おうとするが、今度は右腕に鞭が巻き付き、電流が流れた。彼の髪が逆立ち、彼は悲鳴を上げた。そして、その場で倒れた。

「ああ、うるさいハエだったな。」

六連はわざとらしく言った。

僕はまた彼の元に行こうとしたが、六連の鞭に捕まってしまった。もう電流は流れていなかったが、体の自由が奪われてしまった。

「これでニコルは僕のものだ。残念だったね。」
フロールの指がびくっと反応した。

「ま、まだだ。ニコルは渡さない。僕はフェイを連れてフェアリーランドに帰るんだ。そして昔みたいにも、一緒に暮らす。でも今度は兄弟ではなくて、恋人の関係だ。僕はずっとこれを夢見てここまで来たんだ。簡単に諦めるもんか。」

そう言い、目の前に横たわる剣を宙に浮かし、六連目掛けて剣を猛スピードで飛ばした。六連は足を高く上げ、剣を蹴り飛ばした。だが剣はすぐに方向転換をして六連に襲い掛かってきた。彼はすれすれで避けることができた。剣が勢いよく、床に突き刺さる。

その間にフロールは立ち上がり、床に刺さった剣を再び手にした。僕の体に巻きついた鞭がスルスルと離れていった。

「勝負はこれからだよ。」

フロールは勝ち誇ったような顔をしていた。

ま、まさか。

彼は分裂を始めた。男と女ではなく、フロールの姿で十二人に分裂した。しかも十二人ともバトルコスチュームを着ており、それぞれが剣を持っていた。

「ちよつと待て。何で剣まで分裂しているんだ！」

突っ込まずにはいられない状況だったが、フロールはいちいち質問には答えなかった。僕と六連は、十二人のフロールに囲まれた。彼は剣を宙に浮かせ、刃先を僕たちに向けた。六連はバリアーを張ろうとした。

「そこまでだ！」

ダンスホール中に響き渡る声で走ってきたのは、スターリングだった。

「スターリング！」

「今だ！合体しろ。合体してこのガキを倒すんだ。」

——そうじゃなくて。ちなみにフロールは三千年近く生きているから、千年以上生きている六連より年上だ。

「僕とスターリングが合体してプリンスになっても、パワーアップなんかしないよ。」

スターリングが顔を赤くした。ニコルとSEXしようとして、合体し、プリンスという男でも女でもない、未知の生命体？になったことを思い出したのだろうか？

「ええいつ、誰だお前は！」

十二人のフロールが声を揃えて言ったので、かなり笑えた。が今は笑うことが許されない立場にあった。

「僕はニコルの息子だよ。何なの？これは。今すぐこんなことはやめてよ。話し合いで解決しようよ。ついでに言うけど、人の家の床とか勝手に傷つけないでもらいたいんだよね。」

フロールは剣を下ろすと、一人に戻った。僕は、思わず息をついた。

「助かった。ねえ、どうせならもっと早く来てよ。」

僕は思わずスターリングの手を取った。

「早くニコルになつて。」

彼は意外と冷たかった。まるでフェイイルヴェルクである僕を否定するように言わないで
もらいたい。こういうことには慣れているとは言え、少し傷ついた。

「しゅん。」

僕は仕方なく、分裂した。すると、スターリングが抱きついてきた。

「わーい、ニコルだ。ねえ、どっか怪我しなかった？」

この変わりようもどうかと思う。

「ねえ、何なのあのガキは。」

「ニコルをフェアリーランドに連れ戻しに来たんだよ。」

六連が代わりに答えた。

「しかも彼女と結婚しようとしている。」

スターリングはフロールをにらんで言った。

「ダメだよ。ニコルは僕と結婚するんだ。パパが死んだら結婚するって約束したんだから。」

「ええ——っ！そんな約束してないよ！」

ホント、勘弁してくれ。最近こういう話が彼の口から出なかったから、もう相手にされなくなつたんだと、ホッとしていたのに、彼の方は忘れていなかった。うっかり結婚の約束をしたのは事実だが、彼がすごく小さかった頃の話だし、それにフレッドが死んだ後に結婚するとは言っていない。

「ニコル、君は一体何人の男を騙しとっているんだ！」

フロールが跪いて、ニコルのスカートを引っ張りながら、嘆いていて、スターリングが2
言3言言うと、泣き出してしまった。そして、力尽きて倒れた。

別にニコルが男を騙そうとしているわけじゃない。ただナイチンゲールに始まって、ジェラルド、ジェラルドの父親、ジェラルドの弟のジャニス、ジェラルドの子供のハドロン、そしてフレッドに息子のスターリング、六連というように、愛され続けて二千年以上だ。しかし、エルリックはいてもいなくてもいいように扱われ、フェイイルヴェルクは嫌がられる。もう少しバランスのとれたキャラに分裂したかった。でもニコルもだれからも好かれているわけではなかった。ぶりっ子コスプレ大好き少女は白い目で見られるのがオチだ。例えばエレンとかに。彼女は死んでもロリータ系の服を着れないので、いつもニコルの服を見てはつかかってくる。…単に息子の嫁が気に入らないだけかもしれないが。

ニコルは六連に頼んで倒れたフロールを空き部屋に運んでもらった。
フロールはずっと眠り続けている。彼は急に能力を使ったので、疲れたのだろう。たぶん、精神面もかなりやられていると思う。だがそれは僕に責任はないと思う。どちらかと言えば僕の周囲の人が悪い。

僕はフレッドにフロールのことを知られてしまい、キスマで許したことも知られた。もう少しでスターリングとの関係も知られるところだった。

「わーん、ごめんね、フレッド。でも彼とは本当に何も無いの、信じて。」

ニコルは「歳半の息子を夫の前に出して謝った。

「子供を楯にするな。」

フレッドはルートヴィックを取り上げた。すると、息子が泣き始めた。

「あーあ、フレッドが怒ったりするから、泣いちゃった。」

ニコルは再びルートヴィックを抱き上げた。

「ねえ、怒るのは当然だと思うけど。」

君が呆れるのは分かる、でもどうすることもできなかった。

「ねえ、フロールが目覚めてあたしを連れて行こうとしても、フレッドは守ってくれる？」

「当たり前だろ？」

彼は当然のことながら、フロールから僕が守れると思っている。それは嬉しい。だが彼は分かっている。フレッドが人間である以上、妖精であるフロールには勝てない。しかも僕がフレッドの守護妖精である以上、フロールには到底勝てっこない。そう決め付けるのも失礼だが、僕は自分でフロールに勝つ自信がない。

フレッドが好きなのはニコルだけだ。でもフロールは僕の全てを愛してくれているだろう。いつか、僕が全てを捨てて彼の元に行ってしまったわいためにも、フロールを追い出さなければならぬ。

第10節 僕の体を返せ！

「僕の体を返せ！」

「は？」

フロールは起き上がるなりそう叫んだ。(僕とフレッド、スターリング、六連、ディオネ、未来人など)周囲の人には何が何だか分からなかった。よっぽど『僕の体を返せ！』が面白かったらしく、スターリングが笑い出した。

「ぶっ殺すぞ！」

フロールはまだ機嫌が悪いようだ。後で彼の『ぶっ殺すぞ！』は、口癖なのだということが分かった。恐らく、消滅して、結合した後に加えられたものだと思う。

「弱い犬ほどよく吠える。」

相変わらず六連は彼に挑戦的だと思ったら、ディオネだった。彼女は誰にでもひどい事を言う毒舌家で、六連相手に『ゴーカーマン』とか『チンポマン』とか言えるのは彼女だけだろう。全然羨ましくないけど。

「お前の所に僕の体があるのは分かっているんだ。さあ、僕の体を返してもらおうか！」

フロールは勢い良くベッドから起き上がったと思ったら、裸足のまま駆け出して六連の前に出た。

「僕の体？何の事？」

六連は机の中央(丸いテーブルなのでどこが中央かは分からないが、ベッドの真向かいに

ある席)で、偉そうに長い足を組んで座っていた。

「とぼけるな。お前、小妖精を持っているだろう！その中の何人かは僕の体の一部なの！フェアリーランドに散らばった僕の体はある程度集まったから、後はこの世界にいるか、この世界に住んでいる妖精が持っているかなんだ。自分の使い魔としてね！」

フロールは机を叩きながら、必死で訴えていた。彼は頭についているアンテナ(状の髪の毛)で自分の分身を探していたのだろうか？

「使い魔にしては非力だけだね。未来人を動かしていた時はもつと役に立ったんだけど、今となってはストーカーの役目くらいしか果たせなくてさ。」

——今何て言った？

「ちよつと待って。ニコルたちの種族の妖精は、バラバラになって小さくなると小妖精になるの？聞いていないよ？もしかして、小妖精が集まってニコルができたの？」

相変わらずニコルニコルのフレッドの台詞を、フロールが打ち消す。

「違うよ。小妖精と妖精はそれぞれが別物として存在しているんだよ。ただ僕の体の一部をこいつが小妖精だと勘違いして持っていただけなんだよ。」

フロールは六連をにらみつけた。六連は僅かにあごをしゃくりあげた。

「一応小妖精と契約を交わしてから、彼らを使わせてもらっているんだけどね。それでも返してもらいたいのか？」

「もらいたいね！僕の体は小妖精とは違うから！」

フロールは前かがみになって、六連に顔を近づけて言った。キスされても知らないよ？なんせ、六連の半径50センチ以内に入ると大変危険で、何が飛び出してくるか分からないと、言われているのだから。言ったのはディオーネだが。

「ねえ、契約ってどんな風に交わすの？」

未来人が口を挟んできた。

『契約』：僕はフレッドとSEXすることによって、契約を交わした。契約という名のSEXによって僕は彼の守護妖精になり、見えないが存在する彼の額のマークは、僕のマークに書き換えられた。そして、何が何でも僕と(ニコルと)結婚することを誓わせた。

六連はまるで手品の様に、瞬時に手鏡を取り出して言った。

「契約は僕が小妖精を見つけ次第、鏡の中に転送させ、十秒以内に小妖精が鏡から出てきたら、契約は破棄で、十秒たっても出てこなかったら契約成立ってことにして、僕の小妖精として、サポートしてもらおうことにしているよ。」

この場にいる誰もが思った。『それは契約じゃない。』何でそんな強制的なやり方で、仲間にされなきゃならないのだろうか。自分が彼の小妖精として働かなきゃならなかったらと思ふと、ゾットする。

「この契約の仕方だと、90%は僕のものになるね。おかげで小妖精は何千万というよ。まあ、未来人がいなくなった後は、小妖精の数が減ったけど、それでもいるほうかな。」

「とにかく、小妖精を全て召喚してくれ！」

フロールが言うと、六連は嫌々だが、鏡を振った。すると、鏡が光り出し、羽を生やした、光りの集合体でできたような小指サイズのものから、15センチくらいの大きさのままで、蝶と区別のつかないものから、小人に翅がついたものまでが何人も出てきて、宙を舞い、部屋中を埋め尽くした。

皆がわめく中、フロールはテーブルの上へ乗り、蝶の翅を広げたかと思うと、白く光り出した。

すると、小妖精の一部が彼に近づいてきて、次々と彼の翅に吸い込まれるように入っていた。そして、吸い込まれに来る小妖精がいなくなると、彼は光りを発するのをやめ、蝶の翅をしまった。

「もう済んだの？」

六連が言うと、フロールは頷いた。しかもこつちが恥ずかしくなるような、満面の笑みで。

彼は僕を見るなり、テーブルの上から下り、抱きついてきた。

「ちよつと、フロールっ。」

「フェイ！一緒にフェアリーランドへ帰ろう？」

「で、でも。」

「君はもう消滅する心配はない。僕の体も大体は元に戻った。またあのメルヘンの国で一緒に暮らそう？君の好きな花を一面に埋めようよ。」

彼は僕の手を取り、ぐるぐる回りだした。頭のアンテナも嬉しそうに揺れていた。すでにお花畑の中にいるような浮かれ方だ。

メルヘンの国のあの家が、主をなくしたまま数百年も存在しているというのか？メルヘンの国は花の妖精たちの住む場所で、悪く言えば田舎だ。フロールはそこで僕と永遠に踊り続けたいのだろうか？ニコルなら喜んで彼と踊るだろうが、僕は気が乗らない。罪悪感に襲われないだろうかと、心配している。

そもそもフレッドと無理矢理結婚したのは自分で、彼の側に選択の余地はなかった。それでも彼はニコルとの婚約を受け入れてくれた。が、彼女がいなければ学校を中退することはなかったし、もつと違う職業についていただろうし、今頃別の女と結婚していただろう。彼が生まれた時に定められていた未来は、新たに彼の守護妖精となった僕によって書き換えられた。少なくともフレッドが死ぬまでは彼の守護をしなければならぬのだし、ここを離れるわけはいかない。

六連の鏡の中心で小さな竜巻が起こったかと思うと、あたり一面を埋め尽くしていた小妖精が、どんどん吸い込まれていき、跡形もなく消え去ってしまった。当然のことながら、十秒たつても鏡から出てくる者はいなかった。

僕がうめき声をあげるとフロールは、僕の胸に軽く腕を回し、すべすべでぶるぶるの頬を僕の頬に摺り寄せた。彼は、辺りが静かになっても僕から離れようとしなかった。皆が一斉に僕たちを見た。ああ、視線が痛い。

第11節 誰の所為だと思っっているんだ！

「こうしてニコルと共に食事ができるなんて夢のようだよ。」

フロールは、右隣で朝食をとっているニコルに微笑みかけながら言った。

「あのさあ、僕たちもいるんだけど。」

フロールの左隣にいたスターリングが二人の甘い時間を壊すように口を挟んだ。

「ニコルは今日もかわいいね。」

フロールはスターリングを無視して、ニコルの動作をひとつひとつ観察した。例によって、瞳の中に星を輝かして。

「食べ辛いんだけど。」

ニコルがフロールを見た。すると、フロールが微笑んだ。

――勘弁してくれ。

君に再会してから、僕は何度『勘弁してくれ』を心の中で連発しただろうか。それでも僕は困っているんだから、少しは立ち止まってくれないかな？

「困った顔をしたニコルも素敵だよ。」

フロールがそういうと、ニコルの右隣に座っていて、スープを飲みかけていたフレッドがむせてしまい、咳き込んだ。

「フレッド、大丈夫？」

ニコルはあわてて彼の背中を叩いた。

「だ、大丈夫。黙って聞いてりや、その馬鹿が好き放題言うからさ。」

「誰が馬鹿だって？」

フロールが立ち上がった。でも150にも満たない彼の身長では、誰も驚かなかった。

「お前だお前！」

フレッドは顎をしゃくり上げて、フロールを指した。

「この野郎！ぶっ殺してやる！」

「フロールやめてよ！」

ニコルはフロールとフレッドの間に立った。2人のFが僕の為に争うなんて！…ちなみに僕はFというより、むしろ♀だ。

「ニコルはお前のダッチワイフじゃないんだぞ！」

「ニコルを着せ替え人形にしていた奴に言われたくないな。お陰で彼女のコスプレに皆が迷惑…していないけど。」

フレッドは途中でこつちを見て、最後の言葉を変えた。別に変えなくてもいいけど。

「とにかく、いつまでこの家にいるつもりかは知らないけど、早く出ていけ！」

「嫌だ！何で全然関係ない六連がよくって、ニコルの兄の僕はいけないんだよ！おかしいじゃないか！」

「だったらもう少しお兄さんらしくしろ！」

「嫌だ！お兄さんって言っても血はつながってないんだし、いずれはニコルと結婚するつもりでいたんだ。」

「だから、そういう態度を改めない限り、この家には置けないって言っているんだよ！」

「ええい！じゃあ六連は？あいつこの前ニコルを口説いていたよ？アレはいいの？ねえっ！」

「ところで六連は？」

ニコルは再び両者の間に立って、周囲を見回した。が、六連の姿は食卓にはなかった。

「六連なら帰ったよ？」

ディオオーネが言った。

「どこに！」

フロールが思わずどなる。どう見ても彼と友達になりたそうには見えないが。

「フェアリーランド。」

「ディオオーネは帰らないの？」

ニコルが言うと、

「いちや悪い？」

と機嫌悪そうな返事が返ってきた。『六連の何とか』と思われるのが嫌で別行動をとっているのだろうか？

「とにかく、ニコルは渡さない！絶対に！」

フレッドが言った。

「ま、そう言っていていられるのも今のうちだよ。お前なんて明日には死ぬから、僕は明後日にはニコルを連れてフェアリーランドで挙式するんだ。」

「いい加減にしてよ！」

ニコルが叫んだ。

「どうして『フレッドが明日死ぬ』なんてひどいことが言えるの？フロールなんて大っ嫌い！あたしがフロールと結婚する日なんて永遠にこないわ！」

そう言うなり、ニコルは泣き出した。その場にいるのが耐えられないのか、客観的に自分を見ることに耐えられないのか、エルリックは走って食堂を後にした。

他の人たちはとても食事どころじゃなく、フロールとフレッドの口げんかが始まった頃から、料理皿を移動していき、50人くらい座れる食堂のテーブルの端の席で食事をした。そしてフレッドとフロールとニコル以外の皆はこの部屋から出て行っていた。ボタンと扉が閉まる音が食堂に重苦しく響いた。

3人は一度は扉の音で静かになったが、フロールが突然土下座してきて、

「ごめんニコル！さっき言ったことは謝るから！ねえ、許してよ。嫌いになんてならないで。僕は君がいなきやダメなんだよ。」

「ちょっと、土下座なんかしないでよ、フロール！」

ニコルはしゃがんで、彼の肩を持ち上げようとした。

「じゃ、じゃあ許してくれる？」

フロールはほんの僅かに頭を上げた。

「どうしよう。ねえ、フレッド。どうしたらいい？」

「僕たち夫婦のジャマはしないって約束する？」

フレッドもしやがみ、言った。

「ああ？お前、何時まで『僕』って言ってるつもりだよ。」

フロールは急に声を低くして言った。フレッドが顔を赤らめた。

「三千年近く生きているフロールに言われたくないよ！」

フレッドが言い返さないでニコルが代わりに言った。すると、フロールが舌打ちをした。ねえ、昔のあの優しく、穏やかで、聡明なナイチンゲールはどこにいったの？

「フロールって名前になってから、変わったね、お兄ちゃん。」

「もう一回言って！」

フロールがニコルににじり寄ってきた。

「は？」

「…お兄ちゃん。」

「ニコルの口から再びその言葉を聞けるとは思わなかったよー。」

フロールは目を潤ませ、一人で感動していた。マドレアに『お兄ちゃん』と呼ばれても特に何も感じなかったフレッドは、変人でも見るように、距離を置いてフロールを見るようになった。

3人は大分落ち着いたのか、再び椅子に座った。今度は一人一人の間に最低でも椅子1個分の空きスペースがあった。

フロールは軽くお茶を飲んでから言った。どうでもいいけどこれは僕のお茶だったはずだ。「そう、僕は変わった。長い間分裂していると、一人でいるはずなのに、僕の中に何人もの人格が生まれてきてさ、基本的に僕は生意気なフロールなんだけど、時々暴言を吐くようになったり、涙もろくなったりするんだよ。僕たちは分裂する前の本体が一番不安定だったりするから、それも仕方ないかなって思うんだけどさ。」

「苦しい言い訳はやめてよ。前はすごく優しいお兄ちゃんだったのに、なんでこんなに変わったっちゃうの？」

「あああれはね。点数稼いだよ。優しくすればニコルはずっと一緒に居てくれると思ってね。当時の僕は本当の僕とは言えないんだ。」

優しかったナイチンゲールが嘘で、今のフロールが本来の彼？1500年も自分を演じきることは、果たして可能なのだろうか。

「でもね、君を思う想いは本物だったと思っている。」

「じゃあ何であたしの目の前で消滅したの？フロールが言ってくれたら、あたし、フロールを消滅させなかったよ？一緒に結合したよ？」

フロールは座ったまま椅子を少し後ろに下げ、体を剃り返し、ため息をついた。彼の前髪が立つ。

「あのさ。それじゃ意味ないじゃん。」

「何で？」

「僕は君と結合するつもりはなかったんだ。君と一緒にでもSEXできない体になるなら、消えたほうがまだよ。」

「で、でもさ、じゃあ何でSEXしたいとか、結婚しようとか言わなかったの？」

「ニコルが子供過ぎたから。僕はニコルと一緒に居られるなら、肉体的関係に踏み込む必要はないって考えていたんだ。」

「でもその結果、ニコルは他の男と結婚してしまった。」

ほとんどニコルとフロールの会話になっていたが、フレッドが口を挟んだ。

「そう。それが何よりも腹が立つよ。ニコルの初めての相手は僕だって決めていたのに。」

フロールは軽く舌打ちをし、恨めしそうに言った。

「ニコルの初めてじゃなくて、自分の初めての相手はニコルって決めていたんじゃないの？」

フレッドは軽く笑った。

「悪かったな！未だに童貞で。お前のせいでニコルはいつもしたくもないSEXを強いられているんだぞ！」

フロールは立ち上がり、足をバタバタ動かしキャンキャンわめき出した。

「お前さえいなければ、今頃僕はニコルとうまくいっていたのに。」

「それはないから。」

「うるさい！黙れ。殺されたいのか！それともお前のをチョン切られたいのか！」

フレッドの股が僅かにキュッと締まった。

「フロール。やめてよ。そういうことを言うのは。」

「なんで1500年も一緒にいた僕より、こいつの味方をするんだ。ニコルはこんな奴のどこがいいんだ。チンポか！」

ぶ———っ。

誰か彼をどうにかしてください。男子校に通っている所為で日常的にそんなことを口にしてるのだろうか？どこが『聖』プラネシアンなのだろうか？何が嫌って、その腐った学校の支配人は他でもない自分なのだ。

「お前なんか結婚しないで一生オナニーしていればよかったんだよっ！」

「それはお前だよ。お前！ニコルのこと考えながらオナニーしていたくせにっ！」

フレッドもひどいことを言う。フロールは真っ赤になって否定している。

「お前みたいなロリコンに言われたくない！」

「ニコルはこれでもはるかに年上なんだ、見た目じゃない。」
「うるさいっ！胸の大きい女より、胸がないニコルを選ぶなんて、変態のすることなんだよ。」

「そりゃ、もう少し胸があればいいとは思うけど、肝心なのは下なんだよ！」
「何て奴だ！」

それは君だよ、フロール。二人ともなんて会話をしているんだ。しかも怒鳴らなくてもいいと思う。この部屋は広いからまだいいけど、誰かが聞いていたらどうするんだ。

「二人とも最低！」
ニコルが言うと、

「誰の所為だと思ってるんだ！」

と、二人に同時に言われてしまった。

第12節 脅しを込めて

アレから随分と時間がたつて、その間何をしていたのか思い出せないが、(ときどき、自分が一日のうちで特にこれといって何もなかったりすると、後々自分が何をやってきたのか、思い出せなかったり、人に言えなかったりする時がある。)夜になってもフレッドの機嫌はよくならなかった。ま、当然か。

「ニコル、どうしてくれるんだ。フロールは何時ここを出て行くって言った？もしこのままここに居座るようだったら、その時は…許さないよ？」

フレッドはうつ伏せに寝ているニコルの上に乗る、彼女がつぶれないように気をつけながらも、彼女を下にして、うつ伏せになった。

「ねえ、ニコル。」

フレッドはニコルの背中や、脇などに顔を擦りつけた。フロールの感触とは異なる。

「何か言いなよ。」

彼は体を起こし、ニコルを足ではさんでいる状態は変わらないが、彼女をひっくり返して、仰向けにした。

「フレッドお。」

「何？」

「愛してる。」

『ごめんなさい』の替わりにそう言うと、何も言わずに彼は、キスをした。

「はいっ、そこまで！！」

突然ベッドについているカーテンが勢いよく開き、フロールが乱入してきた。

「キヤーツ！」

その時はちゃんとパジャマを着ていたが、見られたくないところを見られたとう悔しさと

「うか、恥ずかしさを覚える状況に変わりはない。

「今日の日は中止だよ。早く離れて！」

『はいそうですか？』と、ニコルから降りるフレッドではなかった。

「何の用だ！」

「いやだなあ。君に用はないよ。ニコルにあるんだよ。ちよつとどいてくれない？邪魔！」

フロールはベッドの中に入った。

「無駄に大きいベッドだね。3人で寝てもいいくらいだよ。」

彼はニコルとフレッドが抱き合っている隣に、仰向けに横たわった。

「一体何をするつもりなんだ？」

「もしかして、3人でやりたいとか言うんじゃないだろうな？3P？」

フレッドがそんなことを思うなんて。しかも口に出すなんて。もしかして興味があるの？

「死ぬ。」

フロールは短く、そう言った。何かデイオーネみたいだ。彼女はよく、スターリングにそう言っている。スターリングは死なないから意味がないのだが。ただ、『失せろ』と言う代わりにそう言うらしい。スターリングが気の毒だ。

「僕はニコルが寝る前に、とある昔話を聞かせようと思ってね、やってきたんだ。君たちのSEXを妨害するっていう意味もあるけど。」

「やればいいってもんじゃないよね、SEXなんて。」

こうして、彼は昔話を始めた。昔は（フェイイルヴェルクの姿で）フロールと同じベッドで寝ていて、彼はよく昔話をしてくれた。その時彼はSEXについて一言も話さなかったし、僕も質問しなかった。彼は当時からニコルとSEXする夢を見ていたのだろうか。とても想像できない。

昔々あるところにロージー・マインヴォルトという名の妖精がいました。彼女は4人組アイドルの中の一人のフロール・シャンフォードに人目ボレをし、いつも彼を追いかけていました。しかし、フロール・シャンフォードは彼女には目も止めず、常に多くのファンに囲まれていました。しかし、それくらいであきらめるロージー・マインヴォルトではありませんでした。彼女は来る日も来る日も彼の仕事場に通いつめ、ついに彼に名前を覚えてもらえるようになりました。

そしてついに彼の子を身ごもりました。彼女は嬉しくて、彼に報告しようと思いました。そして、『自分の子供が生まれたら、どうするか？』という質問をしたところ、彼は冷たく、「子供はいらない。もしも子供が欲しいなら、君とは別れる。」

と言いました。彼女は泣きながら幼馴染みの男の家に駆け込みました。そして、子供を出産するまで、彼の家で暮らしました。

ロージー・マインヴォルトは幼馴染みに見守られて子供を出産しました。元気な男の子で

した。彼女は出産後、すぐに眠りに落ちました。そして、再び目覚めた後、ロージー・マインヴォルトは赤ん坊を出産したことを忘れていました。彼女の身に何が起きたというのでしょうか！我々妖精の中には人間の記憶を操れるものもありますが、彼女は自分の記憶をコントロールしてしまったのでしょうか？彼女がフロール・シャンフォードの子供を妊娠し、出産したという事実は、彼女の中で切り取られたようになくなっていました。

ロージー・マインヴォルトは幼馴染みの家に生まれたばかりの赤ちゃんを置いて、行ってしまいました。彼女はフロール・シャンフォードと同様にアイドルになり、一時は人気が出ましたが、すぐに忘れられました。さらに、彼の借金を返さなくてはならなくなり、泣く泣く自分の精液を、オナニーしている映像と、SEXしている映像と、レイプされている映像のいずれかを付けて売ることになりました。彼女はフロール・シャンフォードの借金を全額返した後も、彼のために彼を消滅の危機から救いました。しかし、彼女は2度と彼とSEXできない体となっただけでなく、自分が消滅する時に、フロール・シャンフォードに助けてもらえませんでした。彼女の体は今もバラバラになったままのようです。

フロールは、話終わると、ため息をつき笑った。

「何なのそれ？全然昔話っぽくないけど。」

フレッドが笑った。

—— 笑えないんだけど。

「ねえ。ロージー・マインヴォルトとフロール・シャンフォードがあたしの両親だって言いたいのか？」

「そうだよ。」

「んげ。」

フレッドが思わず口を押さえた。

最悪だ。その決して美しくない恋物語を知っていて、あえて言うフロールはもつと最低だ。

「フロール・シャンフォードは僕が大っ嫌いな妖精で、ロージー・マインヴォルトはかつて好きだった子の名前だよ。それが君の両親。君は彼らの子供さ。」

「でも何で嫌いな妖精の名前で学校に通っているの？」

「そのほうがウケがいいんだよ。」

ウケ？ウケって何だよ。

「ニコルは今まで自分が小さかった頃について僕に話してくれなかったけど、少なくとも両親と過ごしたことがないのは分かった。でもこの話は何なの？嫌がらせのつもり？何が言いたいのか？」

「もし、ニコルをフェアリーランドに連れて行けないんなら、僕をここに住まわせる！母親に捨てられた君を引き取って育てたのは、僕だ。君を学校に通わせたのも僕だ。君は僕に何をしてくれた？人間なんかと結婚して、恩を仇で返しやがって。僕がどんなに君の事を想っていたかも知らないで。」

彼はいつの間にかうつぶせになっていて、枕を叩いていた。

「嫌だと言ったら？」

フレッドはフロールにここを出て行ってもらいたくしてしようがないらしい。

「これは脅しだ。もしそれがダメなら僕はこの屋敷を爆破する。もちろん学校も襲撃する。皆が授業を受けている時に学校を粉碎する。僕は本気だ。」

「そんなことができるか！」

「僕は妖精だ！フェアリーランドにいけば道具は全てそろう。」

彼は笑った。そして笑いながら、彼の目から大粒の涙が滴り落ちた。彼はニコルの膝の上に乗った。そして、声を張り上げて泣き出した。これだけ自分の気持ちに正直な妖精も珍しい。おまけに遠慮というものを知らない。ニコルは彼の頭を抱きながらも、困った。フレッドはしばらく愚痴をこぼしていたが、フロールが泣き止まないで、諦めて眠りについた。

翌日、起きると、僕たちはあのまま3人で寝てしまったことを知った。別に3人でSEXしていたわけではない。それにあれ以来3人で同じベッドで寝ることはなかった。

フロールはヴルーベリ屋敷に住むようになった。フレッドとは相変わらず喧嘩ばかりしているが、フロールの見た目があまりに幼く、キス以上のことはしないようなので、彼は許された。そう言えば彼は昔より小さくなった気がする。彼にそう言うと、

「お前が大きくなったんだ。」

と怒られた。僕の今の身長は160弱で、ニコルとエルリックは150弱になる。僕たちの種族の妖精は、普段はあまり背が高くない。が、意図的に巨人になったり、小人にもなれる。さらに、人間で言う1歳から20歳くらいの間の成長をコントロールできる。フロールといった頃は僕も身長が145程度だったが、人間と暮らすようになって、僕の時だけ身長が変わった。それでも160の壁は越えられないが、スターリングは以前未来人より背が高くしようがんばり、162まで伸びたが、それ以上は伸びなかった。今彼は見た目年齢が15歳くらいだが、未来人がいなくなったなら、見た目年齢が5歳ほど若くなると思う。僕たちの種族は基本的に10歳前後の子供の姿をしている。

フロールが学生寮を出てこの家に住み始めて、新学期早々2年3組どころか、学年中の噂になったことは言うまでもない。そろそろ洗脳でもして、これ以上噂が外に漏れないようにするしかないと目を光らせている。先日フロールと校長室で話している所をストローに見られてしまい、言い訳しているうちに、毎週決まった時間に、2年3組の皆をグループごとに校長室に招いてお話しすることになってしまった。支持率アップのチャンスか？冗談じゃない。どう考えても校則違反の彼をこの家に置かしてあげているというのに、フロールの授業態度は変わらなかった。

あまつさえ

「先生にはちゃんとチンポがついているんですか？」
という質問をされてもフオローしてくれなかった。自己紹介の時に結婚しているって言ったはずなのに。男と結婚しているという噂まで流れているのだろうか？悪夢の学園生活だ。

第13節 3人目の客

「マーマ！フェイイー！スターリング！誰か！誰かいる？」

ある晴れた休日の午後。廊下をバタバタとマリーナが走っていた。

「どうしたの？」

僕は（今はフェイイルヴェルクの姿で）廊下に出た。

「お客さんよ！」

マリーナは息を切らしていた。

「六連なら追い出しといて！」

僕の後から出てきたフロールが横から首を出した。

「六連じゃないの。知らない人！しかも魔法の馬に乗ってきたみたいよ。」

「白い馬だった？」

「ううん。」

「じゃあ背中に斑点がついた馬だった？」

「ベージュ色の馬だったわ。」

「なーんだ。じゃあダメだ。」

「何がだめなの？」

馬に対するこだわりは、僕とフロールだけにしか分からない。

「で、その知らない人って言うのは何の用なの？」

「さー、一目見た後すぐにドアを閉めてここにきちちゃったから、分かんない。」

そんなに怖そうな人なのだろうか？

とりあえず、僕とフロール、そしてマリーナは、玄関の扉を開けた。

本当に馬を連れて知らない人が立っていた。彼を屋敷の中に入るように促すと、彼は馬の鼻に軽くキスをし、馬をつながずに中に入った。彼はどぎついピンク色の髪をしていて、金髪に見慣れている僕はかなり驚いた。そういえばマリーナもにごったピンク色の髪をしているが、彼のように目が痛くなるほどではない。

「本物ですか？」

思わず聞いてしまった。

「え？」

彼は必要以上に驚いていた。

「気にしないで。それより、コートをあずかるよ。」

彼は重そうなコートを脱いだ。

「うっ。」

コートの下はノースリーブのシャツで、しかも網目模様の生地で、地肌が透けていて、乳首とかおへそが網を通して見えた。それだけでもセクシーなのに、背中のところ丸くくりぬかれていて、中央に龍の絵が印刷されていた。龍の絵は消そうと思えば消えるものらしいし、印刷するのも痛くないらしい。

「寒いんですか？」

僕は歪んだ顔で言った。

「寒いですね。」

青年は笑った。彼は僕の手からコートを受け取ると、チャックを下ろしてコート内側の生地を外し、羽織った。彼のコートは、コートにジャケットがプラスされたものだったらしい。

僕は再び彼のコートを受け取り、近くのコートかけにかけておいた。

彼のジャケットは黒く、てかてか光っていた。ズボンもデカテカ。靴は硬くて5センチくらいはある靴底だった。

彼はブルーベリー男子学院の卒業生で、新しい校長に文句を言うため、殴りこみにでも来たのだろうか？この服は戦闘服ではないのか。フロールが剣を持ってバトルコスチュームを着て来た時も驚いたが、彼のような服装も見ても驚く。気が動転しているせいで、一瞬戦闘服とバトルコスチュームが同じものだとということに気がつかなかった。

「あの、ところで、何の用ですか？」

また、顔をゆがませてしまう。靴のせいかな、六連よりも背が高い。

「未来人いませんか？彼に会いたくてここに来ました。」

「へ？」

僕はその時始めて彼の顔を見た気がした。彼の青い目が僕を睨んだ。分かった。彼が何でここに来たのか。でも今はこの話はしない。だってこれは僕とフロールの話だったはずだから。

3人目の客は、次の話が始まるまで玄関に立っていた。